

# 舌切雀

井田 安雄

むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんがあったとき。  
おじいさんは山へ仕事に行く。おばあさんは、天気がいいので、今日は洗濯の糊を作って、洗い張りをしようということで、糊を縁先に出しておいたら、スズメが来て糊をなめてしまった。  
それでおばあさんは腹を立てて、スズメのヘラ（舌）<sup>はさみ</sup>を鋏でちょん切ったって。  
するとスズメは鳴きながら、血をたらして向こう<sup>たけやぶ</sup>竹藪の方へ飛んで行っちゃったって。  
それでおじいさんが山から帰って来た。



スズメがいない。

（おばあさんに聞くと）

「スズメが洗濯の糊をなめてしまったから、舌を切ったら、スズメは鳴き鳴き、血をたらしながら向こうの方へ飛んで行っちゃった」

「そりゃあ、かわいそうなことをした」

と。

「それじゃあ、スズメの宿へ尋ねて行かなくっちゃあなんねえ」

って、おじいさんは、大きな山を越えて行ったら、向こうから牛追いが来たので、

「舌切雀のお宿はどこだ。知っていたら教えてください」

って。

「ただじゃあ教えないよ」

「じゃあ、どうすりゃあいいんだ」

「この牛のしょんべん（小便）をお椀に一つ飲め、そうすりゃあ教えてやる」

と。

そういうので、おじいさんは牛の小便を飲んだ。

そうしたら、

「この山を越えて、向こうに原っぱがあるから、そこへ行けばわかる」

と。

それで、おじいさんは山を越えて原っぱへ出た。原っぱをずうっと行ったら、そこにツグミという鳥がいて、赤いバラの実を一杯食べていた。

「ツグミさん、ツグミさん、舌切雀のお宿へ行ってえんだけど、どう行ったら行けるだんべ」

って。

「ただじゃあ教えないよ」

「どうやったらいいんだい」

「この原っぱにはバラがいっぱい生えているから、そのバラの中を裸で、向こうの方まで転んでみる。そうしたら教えてくれるよ」

って。

おじいさんは裸になって、バラの中をずうっと転んで行ったら、

そうしたら、

「それじゃあ教えるけど、この原っぱの先の方へ行け。そこに一本橋があるから、その橋を渡って、岩のところにスズメがいるよ」

って。



おじいさんは教わったんで、原っぱを通過して、橋を渡って、スズメのところへ行っちゃった。スズメたちは喜んで、おじいさんを迎へに出てくれたと。



「おじいさん、よく来てくれた」

「おばあさんに舌切られて、どんなに痛かったろうけど、勘弁してくださいよ。きずも治ったし、よかったよ」と。

それでおじいさんは、スズメの宿でたくさんご馳走になって、そうして、「家へ帰るよ」

っていったら、スズメが、

「おじいさん、お土産につづらをやるけど、大きいのと小さいのと、どちらを持って行きますか」

「わしは年をとって力もないから、小さい方のつづらをください」

と。

それで、おじいさんはつづらをもって、また来た道を、橋を渡って、原っぱを通過して、山を越えて、家へ帰って来た。

そうして、何があるかなとつづらのふたをとって見たら、つづらの中から小判だの、もういろいろの宝物が出てきたと。

それをおばあさんが遠くから見ていて、

「ああ、よし、よし、おじいがあんなにもらって来たんだから、おれもこれからもらいに行がなくなっちゃあなんねえ」

それでおばあさんも、原っぱを通過して、山を越えて、橋を渡って、スズメの宿に着いたと。

けども、スズメは舌を切られたおばあさんだけけど、そんなに粗末にしないで、おばあさんがいよいよ家へ帰るとき、

「おばあさん、お土産やるけど、大きいつづらと小さいつづら、どっちがいい」

「おれは年はとっていても力があるから、大きい方のつづらをください」

って、欲張って大きいつづらをもって来た。原っぱを通過して山へ来たけど、重くって家まで行がねえうちに、山のところでつづらのふたを開けてみた。

そうしたらつづらの中から、ヘビやムカデやいろいろのお化けがたくさん出てきた。

それでおばあさんは、そこでもって腰を抜かしてしまつた。動けなくなつた。



## あとがき

(語り手 利根郡みなかみ町藤原 林義明さん 大正元年生まれ 「カケス通信」引用 平成3年5月所収)

「舌切雀」は日本の五大伽倻の一つとして、よく知られている昔話である。

県内でも各地で聞くことができるし、絵本なども広く行きわたっている話である。

類話として「腰折れ雀」の話がある。これは13世紀のはじめごろにまとめられた『宇治拾遺物語』の中に「雀、報思の事」という題で収められている。この話が「舌切雀」の話を原型とされている。

ところで、今回紹介させていただいた「舌切雀」の話は、利根郡みなかみ町藤原の林義明さんにお聞きしたものである。この話は、林さんが子供の頃に新潟出身のぬいおばあさんから教えていただいたものという。話の内容をみると、おじいさんが雀のお宿へ行く前に二つの難題に挑戦している。県内では類話を聞くことは難しいが、全国的には似た話が各地にみられるという。今回は、藤原に伝わる珍しい話として紹介させていただく。

林さんからは、長い間にたくさんの昔話を教えていただいている。林さんは、利根郡はもちろん群馬県を代表する昔話の名人である。

この「舌切雀」の話は、典型的な、本格的な形の語り口としてご覧いただきたい。

